

## 安倍首相等の伊勢神宮式年遷宮儀式参列及び靖国神社例大祭真榊奉納等に対する抗議声明

安倍首相は8名の閣僚を従えて、10月2日、宗教法人伊勢神宮の式年遷宮「遷御の儀」に参列しました。戦後の現職首相として初めての参列です。

続けて、安倍首相は10月17日、宗教法人靖国神社秋季例大祭に「内閣総理大臣 安倍晋三」と記名して真榊を奉納しました。

いずれも、憲法20条第3項において禁止されている政府機関の宗教行為に当たり、信教の自由・政教分離の原則を侵すものであり、ここに抗議の意を表明致します。

戦前、皇祖神をまつる伊勢神宮は「国家神道」の本宗として、靖国神社と共に、神権天皇制軍国主義の中心的存在でした。特に靖国神社は、戦死者と遺族を顕彰・慰撫し、戦争を美化し遂行するための軍事・政治・宗教的施設としての役割を果たしました。「A級戦犯」合祀は、靖国神社の理念からすれば当然の帰結です。

国家神道体制の下、わが国は侵略戦争を拡大し、アジア諸国に殺害をはじめあらゆる人権を奪う多大な犠牲を強い、国内においては人々を戦争に駆り出し、別離や死へ至らせ、思想・信条・表現そして信教の自由をはじめとする全ての人権を奪っていきました。

キリスト教会も礼拝や伝道を制限され、迫害を受けるなど被害者でした。しかし、時代の濁流に押し流され沈黙、迎合し、結果的に多くの教会が戦争に協力してしまいました。

戦後、わが国は、国家神道体制下における過ちを反省し、平和憲法、その中でも特に厳格な政教分離の原則を制定し、今日に至っています。

安倍内閣は、遷御の儀参列・真榊奉納と前後して、「積極的平和主義」の名の下に、国防軍、特定秘密保護法、国家安全保障会議、武器輸出三原則の見直し、集団的自衛権の行使、憲法「改正」、原発推進、原発輸出等々を進めています。君が代日の丸の強制も過酷になっています。これら一連の動きは、「戦争のできる国」への危険な道備えではないかと懸念致します。

「積極的平和」とは、『『平和＝戦争のない状態』と捉える『消極的平和』に加えて、社会・世界の構造に起因する飢餓、抑圧、差別などの『構造的暴力がない』状態』（ヨハン・ガルトゥング）、すなわち、単に戦争がないだけでなく全ての人々の人権が積極的に保障される状態ではないでしょうか。

私達は、「平和をつくり出す人たちはさいわいである。彼らは神の子と呼ばれるであろう」と言われたキリストに従い、武力等によらない「積極的平和」をつくり出すために、また、かつて「戦争協力」した自らの罪責を深く悔い改め、教会に託されている預言者的使命を果たすために、政府や政治権力者達の危険な動きに対して、抗議の意を表明致します。

2013年11月

日本バプテスト連盟靖国神社問題特別委員会